

『保元物語』写本目録稿補遺

原水民樹

小稿は、『保元物語』写本目録稿「言語文化研究」第6巻 徳島大学総合科学部 平¹・二の補遺である。作成様式・要領は、上掲拙稿に倣う。

一 現存写本目録稿補遺

第三類 京図本系統（根津本系統）

（根津本系列）

京都国立博物館蔵天正二十年書写本

（解）原水「京図本系統『保元物語』本文考統貂」『言語文化研究』第9巻 徳島大学総合科学部 平¹・二

①名古屋市鶴舞中央図書館蔵佐々木輝子氏寄贈本

（史研本系列）

松室本（下巻）

（解）原水「伝松室種盛筆『保元物語』について」

第四類 金刀本系統（宝徳本系統）

（陽明本系列）

②糸魚川市民図書館蔵本

（参）『糸魚川市民図書館所蔵 図録和漢書と蔵書印』（糸魚川市教育委員会 平¹）³

③佐賀県立図書館蔵本（流布本系統の為朝説話を付加）

（参）「図書館だより」（佐賀県立図書館 昭²・三）、島津忠夫「佐賀藩の文事」（『島津忠夫著作集』第十巻 物語 和泉書院 平¹）⁸

原水蔵彩色絵入写本零葉

（解）原水「奈良絵本保元・平治物語について」（『汲古』第⁵4号 平¹・六）⁶

（松井本系列に近い伝本）

④國學院大学蔵本（正木本系統と同形）

(京図本系統の為朝説話を付加)

- (解) 平成十八年度國學院大學特色ある教育研究「文献学の基礎を体験させる古典教育」研究成果報告書『古典籍体験の会で学ぶ』(平⁹1・三)
 (参)『玉英堂稀覯本書目』第¹⁹8号(平²・九)

第九類 流布本系統 (版行本系統)

王舎城美術宝物館蔵絵巻

- (参)『源平合戦とその時代』(香川県歴史博物館 平¹⁵1)
 石川透『奈良絵本・絵巻の生成』第四編第三章太平記絵巻・絵本の制作(三弥井書店 平¹⁵1)
 原水「奈良絵本保元・平治物語について」(汲古)第⁵4号 平¹⁶1・六

⑤名古屋市鶴舞中央図書館蔵九帖本

- (影)資料館 8⁹24—1
 (解)「国文学研究資料館蔵『保元物語』・『平治物語』及び『平家物語』(写本)マイクロ資料解題」(調査研究報告)第⁵2号 国文学研究資料館 平¹⁶1
 ・十一

⑥原水蔵三帖本

⑦原水蔵一帖本

彦根城博物館蔵彩色絵入写本

- (解) 原水「奈良絵本保元・平治物語について」(汲古)第⁵4号 平¹⁶1・六

第十類 その他の諸本

伝北条時頼筆断簡(未見)

- (影・翻) 久曾伸昇『物語古筆断簡集成』(汲古書院 平⁴1)

松室本(上巻)(東大国文本とまとめて、一系統を立てるべきか)

- (解) 原水「伝松室種盛筆『保元物語』について」(『中世軍記の展望台』和泉書院 平⁸1)

関係文献

宮内庁書陵部蔵保元平治物語類標

- (影)資料館 2⁰9—2—3⁶J 107
 (解)「国文学研究資料館蔵『保元物語』・『平治物語』及び『平家物語』(写本)マイクロ資料解題」(調査研究報告)第⁵2号 国文学研究資料館 平¹⁶1
 ・十一

⑧国文学研究資料館蔵奈良絵断簡

- (流布本系統本文に付された絵か)
 (解) 国文学研究資料館通常展示「平家物語とその周辺」(平成十六年九月三十日〜十月二十八日)のリーフレット

⑨真宗興正派興正寺蔵『ふなおか山の物かたり』

- (解)『お伽草子事典』(東京堂出版 平⁴1)

⑩鶴岡市郷土資料館蔵本

蜷川家文書「保元物語聞書」

(解) 鈴木彰『『蜷川家文書』にみる軍記物語享受の諸相とその環境』(『文学』平⁵1・三、⁶1・一)。後に『平家物語の展開と中世社会』(汲古書院 平⁸1)に収録

仁和寺蔵保元平治合戦図屏風

(影・解)『源平合戦とその時代』(香川県歴史博物館

平⁵1)

メトロポリタン美術館蔵保元平治合戦図屏風(未見)

(複製)梶原正昭他編『保元平治合戦図』(角川書店

昭²6)

二 伝本解説

① 名古屋市鶴舞中央図書館蔵佐々木輝子氏寄贈本

『平治物語』(三卷三冊。八行本系統)と揃え。外題は、上巻は子持ち杵刷題簽(表紙左)に「保元物語 上」と墨書、中、下巻は、薄朱色無地題簽(中巻は表紙左、下巻は表紙中央)に「保元物語 中(下)」と上巻とは別筆記載。端作は「保元物語 上(下)」。表紙は、上、中巻は濃灰色地の近代紙、下巻は濃縹色無地。三卷三冊。墨付紙数上卷三五丁、中卷三九丁、下卷四一丁。遊紙なし。袋綴。本文料紙は楮紙。寸法は上、中卷二八・〇×二〇・二、下卷二八・五×二〇・五。一面十行。平仮名交じり。各冊表紙右肩及び見返し左肩

に「424/わ1(3)/321 見返しに「蜷川/大正十四年七月廿三日/佐々木輝子君/市立名古屋図書館」のラベル貼付。端作の下に「桂雨蔵書」(二・九×一・二)の朱長印、「市立/名古屋/図書館/蔵書印」(七・五)の朱方印。上巻最終丁裏に「卅三叶岡図畔壽・25956・F14 卅35956」の楕円朱スタンプ(番号数字は青)。

該本(以下、佐々木本と略称)は、京図本系統根津本系列に属する本文を伝えている。根津本系列の伝本は取り合わせ本を含めてこれまでに八本確認されているが、これに佐々木本が加わる。系列中、佐々木本は、龍谷大学図書館蔵本(以下、龍大本と略称)と最も近い。とはいえ、直接的な書承関係にはなく、兄弟もしくはそれに準じる関係にあると見られる。平仮名表記の多い写本で、純良性の面では、後述するように、龍大本に劣るようだ。大きな欠陥としては、錯簡に起因すると思われる重複記述が、上卷三三丁表から三五丁裏にかけて見いだされる。左に示すと、

し^(イ)ゆしんでんわうのきようあまつやしろのくにつやし
一^(ロ)よすしかれはこのもとかやのめといつれのところにか
わかうすいしやくのきよにあらさる(中略)賀茂大明
神ほんせいをまもり給ふきもむ一^(ハ)ろさためおき給ひし
よりこのかたかみわさ事しけくして(中略)てんおんこ
とくくふつしやうに一^(ニ)よすしかれハ木のもとかやの
もといつれの所にか和光すいしやくの居にあらさる(中
略)賀茂大明神ほんせいをまもり給ふ鬼門一のかたにあ

たつて (2⁸ | 1² 3 | 0 | 1)

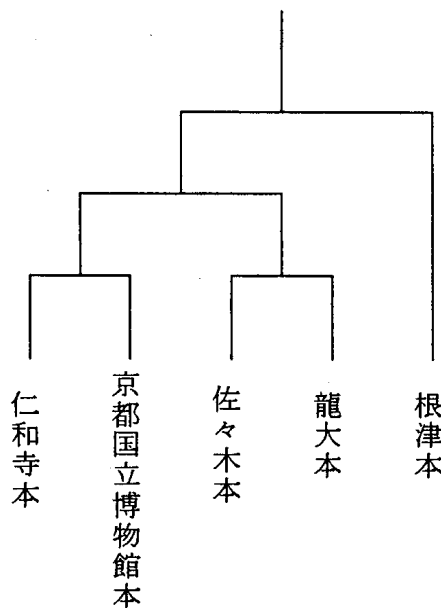
(引用に際しては振り仮名を省略。以下、他本についても同処置。引用文中の横棒並びに行間(イ))

(二) の符号は私に付した。また、本文末()内に、和泉書院本における当該記述の所在位置を示した。2⁸ | 1² は、和泉書院本二十八頁第十二行を意味する。以下も同要領での表示を行う)

右の文章は意味が通じない。これは、(ロ)部(ハ)部に錯簡を生じているためであり、(イ)部↓(ハ)部↓(ロ)部と続けて初めて意味が通じる。この錯簡に気づいた筆写者が、(ロ)を本来有るべき位置に再度写し取ったものが(二)である。従って、(ロ)と(二)は全くの同文で、(ロ)を削除しなかったために、重複を生じる結果になったと解される。

なお、錯簡箇所が改丁部と一致していない事実は、この錯簡が佐々木本書写以前の段階で既に生じていたことをものごたする。また、重複部である(ロ)(二)間で漢字・平仮名表記の異同が認められることより、転写姿勢が、表記についてまでは厳密でなかったことを推測させる。佐々木本には、大小にわたる欠脱が相当数見いだされる。その中、二十音節を超える規模の欠脱(伝本間で小異があるが、龍大本によって計数する。ただし、読み方により誤差を生じる場合がある)は、十七箇所見いだされ、中で、百音節に及ぶまたそれを超える事例が二箇所ある。これら欠脱の多くは目移り等の不注意に起因するようだが、中には意図的な省筆もあるようだ。

こうした省筆は、例えば、「ひさまつき」(龍大本―庭上にひさまつき)、「はなつ」(龍大本―よひいてはなつ)、「此上ハとおもひて」(龍大本―此うへハちからおよハずと思て)、「しのひて居たりけり」(龍大本―ふかくしのびいたりけり)等の例が示すように、龍大本に比して佐々木本には字句を省略する傾向が認められることと軌を一にする現象として捉えられるだろう。佐々木本とその周辺伝本との相互関係は、細部については種々疑問もあるが、大局としては左図の形で捉えてよいと考える。



(1) 原水「京図本系統『保元物語』本文考統紹」(「言語文化研究」第9巻 徳島大学総合科学部 平1⁴・

二)

(2) それらは、上巻二ウ、四ウ、六オ、一八オ、中巻一一ウ、一八オ(二箇所)、二二オ、三〇オ、三二ウ、三五ウ、三六ウ、下巻一三ウ、一七オ、一八オ、二

一ウ、三八ウに見いだされる。中で下巻一三ウは九十九音節、下巻二一ウは百二十八音節に及ぶ。

(3) 省筆の可能性が考えられる事例を左に示す。(一) 内の記述が佐々木本には存在せず、これを龍大本で補う。

① こんけんをおろし奉るに日中まではおりさせ給ハす(法皇をはしめ奉て供奉の人々いかなるへき御事やらんとて目をすまし心をしつめておはしける) ひつしのときにおよむてこんけんおりさせ給ふ(4-1¹)

② 一騎かうへに五き十きおちかきなりければ(うのゝ七郎心はかうなれどもちからおよハす無勢なれば) いけとられてけり(1-1⁶)

③ ゆんつゑにすかりて(心ちをなをしてかふとをしつくるひ弓とりなをして)さらぬやうにて(4-4⁶)

④ 今ハかうそとて(おとゝ其のふし給へる中にわけ入て)十ねんたからかにして(8-4⁴)

⑤ 三郎太夫ちからおよハすして(一方へさたしてハあしかりなと思ひ)りやうはうへねんくをさたしければ(10-5⁵4)

② 糸魚川市民図書館蔵本
原本未見。複写物により調査。外題は、表紙左に、打ち付

け書きで「異本保元物語 上(下)」。表紙右下に「共三」と墨書。剥離した上巻表紙裏打紙に「古写本写/異本保元物語 上」と墨書。端作は「保元物語上(下)」。各冊表紙右肩に「山越ノ第一号/共三冊」のラベル貼付。端作下に「尾張州取田/弘八正紹蔵」の長印。三巻三冊。墨付紙数上巻六一丁、中巻七七丁、下巻五一丁。袋綴。一面九行。平仮名交じり。各巻末に左掲の奥書がある。

天保五年甲午八月十日写了 正紹(上巻)

天保五年甲午七月廿四日写 正紹(中巻)

保元物語古写本三本自大父以来/蔵之然不知何人之筆跡而出于/何處今以/水府候参考本^{アヤ}雉校之与所謂/京師本杉原本大同小異其間/載諸本不見事実奇世之/別珍也子孫可永保之為家/宝云尔/明和九辰八月 河邨秀興

□(花押欄)

天保五年午八月五日河村氏秀嘉/より借得て写之/橘正紹(下巻)

該本は、金刀本系統の陽明本系列に属し、陽明文庫蔵三巻本・宮内庁書陵部蔵平仮名交本(正木本系統)・国文学研究資料館蔵宝玲文庫旧蔵本(正木本系統)、とりわけ陽明文庫蔵三巻本に最も近い本文を伝えているかと見られる。書写は丁寧だが、一行程度の欠脱が六箇所認められる⁽¹⁾。他、些細な誤字や脱字・句が全体に亘って見いだされることより、本文の純良性の面では陽明文庫蔵三巻本にやや劣るかと思われる。また上、中巻の各々に錯簡を生じている⁽²⁾。なお、両者は直接

の書承関係にはない。

(1) それら欠脱は左の通り。() 内の記述が糸魚川本には存在せず、これを陽明文庫蔵三卷本で補う。また、本文末() 内に旧日本古典文学大系本における当該記述の所在位置を示す。

① 御寿命(一百廿七歳なり其後の帝王百十四年或) 一百廿余年也(5⁶—8)

② 一天の君のせんしにこそしたかひ給(ハめおりゐの帝の院宣にしたかひ給) ふへき(7⁰—1¹)

③ 国津社をさためをきたまひしより以来(神わざ事繁して国の栄只) 此事のミなり(8⁸—1¹)

④ 仙洞にしこうして(彼者ハ合戦の道におひてハさか²しき者にて候か) 彼ともからをひきくして(9²—5)

⑤ 波多野小次郎(安房国にハ安西金鞠沼平太丸太郎) 上総国にハ助八郎(9⁴—1¹)

⑥ 内大臣実能(公左衛門督基実右衛門督公能) 蔵人少将忠近(9⁵—1⁶)

(2) 上巻第二九丁表第九行の「みるよしきこえける」から第四七丁表第一行「おふみの国かうか」までの部分は、第一四丁裏第七行の「高松殿をうかゝい」と「山にたてこもりて」の間に入るべきもの。また、中巻第五五丁表第三行「渡し奉り」から第七四丁表第九行「以嗽意」までの部分は第三四丁表第九行の

「嵯峨の方へ」と「乱入之条はなはたいはれなし」の間に入るべきもの。

③ 佐賀県立図書館蔵本

原本未見。複写物により調査。外題は、表紙中央題簽に「ほうけん物語 上(く下)」。端作は上巻「保元物語」、中、下巻「保元物語中(下)」。各冊表紙右肩に「913.43/H.8 1—1(3)」並びに「禁帯出」のラベル貼付(該番号は、表表紙見返し(中、下巻は裏打ちが剥離した表紙裏面)にも書き込まれている)。また、見返し(中、下巻は裏打ちが剥離した表紙裏面)に「嵯峨」及び「★府内河内図嵯峨★」の印、41.10.31/41.11.53(1155)の楕円印、巻末に縦楕円印(不読)及び「41.11.53(1155)」の番号印。同番号印は、上、下巻墨付第三丁裏、中巻墨付第四丁裏下欄にも押される。三巻三冊。墨付紙数上巻六二丁、中巻七六丁、下巻五九丁。袋綴。一面一〇行。平仮名交じり。島津忠夫氏の指摘にあるように、該本(以下、佐賀本と略称)は金刀本系統の本文を有するが、より精確に言えば、金刀本系統陽明本系列本文に流布本系統の為朝説話を付加した伝本である。金刀本系統は、配流された為朝の自害に至る経緯を記す為朝説話を持たないことを特色とするが、その金刀本系統に他系統の為朝説話を付加する点、京師本系統や正木本系統と同じである。その相違は、上掲二系統が為朝説話を金刀本系統本文の後に付加するのに対し、佐賀本が、金刀本系統

の為朝配流記事と崇徳院崩御記事との間に挿入する、すなわち、為朝説話の追加位置が異なる点にある。京師本・正木本をそれぞれ一系統とみる永積安明氏の立統法に従うならば、佐賀本もまた当該一本をもって例えば佐賀本系統といった名称のもとに立統する考え方もあろうが、とりあえずは、金刀本系統中に収めておく。

次いで、佐賀本の本文性格をいまい少し詳しく述べる。まずは、金刀本系統を備える部分だが、これは陽明本系列に属する本文を持ち、系列中とりわけ広島大学国語学国文学研究室蔵米子市立米子図書館旧蔵本（整理番号 図ナ／2364／Z 以下、広大本と略称）との間に緊密な関係が認められる。広大本を紹介した旧稿⁽¹⁾において、その特徴として掲げた三つの現象、すなわち、上巻第七丁表に見られる百音節を越える欠脱、下巻の錯簡、師長書状を漢文体で書きだしながら中断し、書き下し文で改め書きする現象が、佐賀本にもそのまま見いだされることが、両者の緊密性を雄弁に物語っている。こうした緊密性は、各丁の配字にも認められ、上巻については、一面の配字がほぼ一致している（中巻第二十二丁あたりから両者の字詰めに差異が生じ始め、以後は、佐賀本の字詰めが詰まってゆく）。如上、両本はきわめて近い関係にあることが了解されるが、本文の不備を補い合う関係にあることより、書写上の親子関係にはないようである。

両者の異同は、用字に関するものが大半を占める⁽²⁾が、他に、微細な字句の異同が百箇所弱程度見いだされる。中で比

較的規模の大きいものが三箇所ある⁽³⁾が、これらはいずれも広大本における欠脱と判断され、佐賀本に本来の姿が残されている。しかし、他の微細な異同については、いづれかと言えば広大本に本来の姿が残されている場合が多いようだ⁽⁴⁾。結局、本文の純良性においては、佐賀本は広大本に比し、比較的顕著な欠脱を持たないという点では優れているが、細部に関してはやや劣るのではないかと思われる。

次いで、流布本系統本文を有する為朝説話部について検討する。当該部が流布本系統中のいかなる種類と係わるか、判定は意外に難しい。ただ、為朝鬼が島渡島譚が「さるほとに」から書き起こされている事実⁽⁵⁾に注目するなら、整版本との関係が考えられそうだ（当該部に限らず、話柄を「さるほとに」で起こす手法は、流布本系統の場合、古態本には少なく整版本等の後出本にしばしば見られる）。そして、整版本の中では寛永元年片仮名交本（以下、寛元本と略称）との関連が指摘できそうだ。関連性を示唆する具体的事例を以下に記す。（一）内は、旧日本古典文学大系本における当該記述の所在位置。「わしたにとはに千里をとふといふ」^(39下8)の、傍線部「とは」は、他本に見られる「一羽」^(39下8)（「一は」）を誤ったものである。「一羽」^(39下8)（「一は」）を「とは」と誤った理由は分からないが、寛元本には「一羽」^(39下8)とあることより、佐賀本の「とは」は寛元本における振り仮名「トハ」と係わりがあるのではないかと推測される。また、「こやしなれハしどうわかためあしかりなんとや思ひけん」^(39下1)、「けつきのこやしやなしとそ

人申ける」(39下1)⁸の傍線部の各々は、他本に見られる「勇士」「勇者」を誤ったものである。当該部、寛元本では「勇士」ユウシ「勇者」とある。佐賀本の「こうし」「こうしや」は寛元本における振り仮名「ユウシ」「ユウシヤ」の「ユ」を「コ」と読み誤ったことに原因があるのではないか。「京中のきせんたうそくたんしゆす」(39下1)²の「たんしゆ」もまた同様に寛元本「群集」の振り仮名「クンジュ」の誤読に由来する可能性が考えられる。こうしたことより、佐賀本には寛元本との関連性が認められるようだ。ただし、全体を通した場合、寛元本との間に特に緊密な関係を見いだすことはできない。寛元本と相違する字句も見いだされるし、為朝の舅の名に「たゝしけ」「たゝみつ」の混乱が見られる点などは古態本と合致している。如上、諸現象の指すところ一点に収斂できるものではないが、一つの推測として、佐賀本が為朝説話に利用した親本は、版本自体ではなく、寛元本を源流としながらも、転写の過程で他伝本の影響をも受けて形成された写本であろうと考えることは可能ではないか。上記の判断が許されるなら、佐賀本の書写年次は当然ながら寛永元年を溯らないことになる。

(1) 『保元物語』写本目録稿(『言語文化研究』第6

巻 徳島大学総合科学部 平1・11・12。

(2) 例示すると、「くらい」と「くらゐ」、「きわめて」と「きハめて」、「かつせん」と「かつせむ」、「給ひ」と「たまひ」、「是より」と「これより」といった類。

(3) それら異同は以下の通り。本文は佐賀本による。傍線部相当記述が広大本には存在せず、広大本における欠脱と判断される。

- ① くんこうけんしやうにも申かへてちゝ一人が命をばなどかたすけざるべきわれだにもたすかりなば(138下1)
- ② さしちかへてしにゝけりかゝりけれハふなおか山にてしうく十人ハうせにけりはたの次郎くひともちて(157下6)
- ③ 御車を引むかハせてなにとか申させ給ひけん御なみたにむせはせ(「せ」が広大本「させ」)給ふとはかりこそ(162下1)
- (4) その事例をいくほどか例示する。
 - ① あいりをおとるかさせゝあいりよをおとるかさせ(8下5)
 - ② はんきならんゝはんきないらん(6下1)
 - ③ なにと聞わけたる事なれ共ゝなにと聞わけたる事なれ共(7下1)
 - ④ よりちかになかつかさのせうよりちかゝまこゝよりちかに五代なかつかさのせうよりちかかまこ(6下5)
 - ⑤ かううのちんゝかうのちん(7下1)
 - ⑥ しやうくん太子ゝしやうくう太子(8下3)
 - ⑦ さしものにてハゝさしものものにてハ(9下1)
 - ⑧ かなしけれ御なみたにむせはせたまふゝかなしけれやとて御なみたにむせはせ給ふ(132下1)
 - ⑨ いづの国をも給ハるへかりしゝいつれの国

をも給ハるへかりし⁽¹³⁻¹⁾、⁽¹⁶⁾⑩六十六人まうけ十六かこくに一人づゝ一六十六人まうけ十六かこくに一人つゝ⁽¹⁴⁻¹⁾、⁽¹⁴⁾⑪今ハかうにてこそあれ—今ハかうにてあれにてこそあれ（旧大系本には相当文なし）、⁽¹²⁾⑫くらゐにのほりかゝるためしも—くらゐにのほりたりかゝるためしも⁽¹⁶⁻²⁾。

—を挟んで上が佐賀本、下が広大本の本文。①

②中、⑤⑩⑪の場合は佐賀本の本文がよく、①②③

④⑥⑦⑧⑨⑫の場合は広大本の本文がよい。

④ 國學院大学蔵本

原本未見。複写物により調査。千明守氏の解題（「國學院大學所蔵『保元物語』『平治物語』及び関連資料書誌解題」（『古典籍体験の会で学ぶ』平1・3）に「本文は金刀比羅本に近似する。ただし下巻の末尾に為朝島渡りの記事が増補されている（本文は京図本に近い）。」と記されるように、金刀本系統本文の完結した後、改面して「是ヨリイ本」の傍書のもと、京図本系統の「扱も為朝伊豆国大嶋に月日を送りけるか」以下の為朝説話を付加した伝本である。正木本系統と同形態だが、これは結果的現象にすぎない。正木本系統は陽明本系列の本文を、國學院本は、後に述べるように、松井本系列に近い本文を有する。即ち、國學院本と正木本系統は金刀本系統中の異なる系列の本文を有しているので、形態面では一致していても、成り立ちを異にすると判断される。故に、國學

院本を正木本系統に属する一本と捉えることはしない。

國學院本を松井本系列に近い伝本と判定した理由を述べる。犬井善壽氏は松井本系列の特徴として、該系列が共通に欠く部分を十八箇所にわたり掲出される⁽¹⁾が、國學院本にはその中十六箇所の一致が認められる。十八箇所全てが一致してはいないので、松井本系列に属する一本とみなすことはできないが、松井本系列に極めて近い位置にあるということになる。金刀本系統四系列のいずれにも属さないが、松井本系列に近いという点は、早稲田大学図書館蔵津田葛根識語本に似る。しかし、國學院本と早大本の間に特別の親近性は見いだされない⁽²⁾ので、両本間に直接或いは間接の交渉があった可能性は低い。

さらに國學院本の本文性格を探るなら、旧稿の早大本の項に記したように、松井本系列諸本の場合、系列全体に共通する欠脱・異文の他に、各伝本に固有の、或いは数本のみ⁽³⁾に共通する欠脱が相当数存在している。いま、これら欠脱を國學院本に照合するに、顕著なものとしては三箇所のみが一致している。この事実は、國學院本の本文が、松井本系列に近似しながらも、それらよりも純良な本文を伝えている⁽³⁾だろうことを推測させる。これに係わって述べるなら、松井本系列諸本（蓬左文庫蔵本及びその転写本を除く）には、平仮名が多用されており、そのため意味の取りにくい箇所も多い。が、國學院本には漢字表記が多く、しかもその表記が妥当である場合が多い。この事実なども國學院本の純良性を示唆す

る現象の一つに数えられようか。本文の純良性という点から最も注目すべきは、松井本系列が共通に欠く十八箇所中、二箇所については國學院本に欠脱が生じていない事実である。この二箇所に、犬井氏が言及しておられない一箇所を加えた、計三箇所の本文を左に掲げる。本文は國學院本に依るが、参考のため、文末（一）内に旧日本古典文学大系本における当該記述の所在位置を示す。

① 馬よりさかさまに落かゝりたれとも矢になハれて暫は落す馬おとろきてあなたこなたへはしりけれハかなく
り落にそ落にけるあまりに武者のかうなるもかへつておこましくそおほゆる（10⁵—4）

② 心ほそく思しめせとて光弘法師とくまいれといへど仰らる光弘法師と申ハ去十七日の夜きられたるをもしろしめされすして御ことつてのありけるこそ哀なれ（16³—1）

③ 人間に命のなかきをこそよろこひとすれと我一人ハなかきを愁とす春日大明神ねかハくハ我いのちをとらせ給へ（16⁸—1）

各項ともに、松井本系列諸本には傍線部相当記述がない。いずれも文脈上必要な詞句と判断されるので、松井本系列における共通の欠脱である。しかし、他系列には相当詞句が存在する（ただし、②は宝徳本系列の一部の伝本にもない）ので、これらの箇所については、國學院本は、松井本系列とは異なり、欠脱のない妥当な本文を備えていることになる。こうした現象もまた、國學院本が松井本系列形成以前の古態を

残したものとみなしてよいのではないか。

以上、述べてきたことをまとめると、國學院本は、松井本系列に近似しつつ、かつそれよりも純良な本文を持つ伝本と捉えられる。ただし、該本には小規模ながら後の増補と思われる固有本文や独自の改変も見いだされるし、またその一方で独自の欠脱や省筆も少なからず認められる。従って、総体としてこれを捉えるなら、純良性の面で注目される一面、固有の改変をも有する伝本として認識されよう。

國學院本が、金刀本系統の本文を有することは以上述べたとおりだが、注意すべきは、該本には、部分的ながら、金刀本系統以外の他系統と同趣の詞句も見いだされる事実である。以下、この点を考えたい。左に顕著な事例を示す。本文は國學院本に拠る。

① 此御なけきほどの御事むかしも承及ハす一院女院の御歎中く申もおろか也（5⁶—2）

松井本系列を含む金刀本系統諸本には傍線部相当記述がない。しかし、半井本・京図本・流布本などの系統には同趣文が存在し、中でも京図本系統には「一院と女院の御歎中々申もおろかなり」（本文は筑波大学附属図書館蔵根津文庫旧蔵本による。以下、根津本と略称）と、國學院本と同文が見いだされる。両者、その所在位置は異なるが、京図本系統における位置が妥当である。

② 人々心をしつめいかなるへき事やらんとめをすましてさふらひけるほとに末のかたふく程になりて権現既にお

りさせ給ぬとおほしくて (5—8—3)

松井本系列を含む金刀本系統諸本「人々こゝろをしつめたひくさんけいのともからにいたるまでめをすまして候けるほとへてのち」(静嘉堂文庫蔵松井簡治氏旧蔵本による。以下同)とあり、國學院本とは異なる。当該部、京図本系統には「法皇をはしめ奉て供奉の人々如何成へき御事やらんとて目をすまし心をしつめておハしける未のかたふく程に成て」とあり、國學院本の傍線部に相当する詞句が存在する。他系統については、國學院本に似通うものもあるが、近似性において京図本系統に及ぶものはない。

③ 御託宣有けれハ法皇を始奉て公卿殿上人供奉の人々皆心さハきして色をうしなひ (5—8—1)⁴

松井本系列を含む金刀本系統諸本「御たくせんありくきやうてんしやう人みな心さはきして色をうしなひ」とあり、國學院本とは異なる。当該部、京図本系統には「御託宣ありければ法皇をはしめ奉りて供奉の人々色をうしなひ」と國學院本の傍線部に相当する詞句が存在する。ただし、流布本系統にも同様の本文が見られる。

右掲の現象は、國學院本と京図本系統の関連性を示唆するものとして捉えられる。京図本との関連性という立場から國學院本を見直すなら、単語の次元においても両者には少なからぬ符合がみいだされる。それらの中から特徴的な数例を掲げる。

① 義朝に捕縛された東三条殿の留守を國學院本・京図本系統ともに「藤原光定」(京図本系統は表記が区々)とする。金刀本系統諸本は「光員」(表記は区々。「ミつす」「かず」等と誤る伝本もある)とする。また、半井本「藤原光真」、鎌倉本「光定」、流布本「藤原光貞」(表記は区々だが、「藤原光定」とするものはない)とする。

② 國學院本には、義朝勢中に「足助の冠者」の名が見られるが、京図本系統にも「あすけのくわしや」(学習院大学図書館蔵斑山文庫旧蔵本(以下、斑本と略称)による。系統内他本は「足利冠者」(表記は区々)と見える。他系統には相当人物名がない。

③ 東三条殿への行幸の供奉者とともに「頭中将公親左中将光忠」(京図本系統中、佐々木本は「公親」を「まんちか」と誤る。また、斑本は欠脱)の名が見いだされる。金刀本系統・鎌倉本には相当人物名がない。ただし、流布本系統にはあり、半井本系統にも近似形が見いだされる。

④ 桑原の安藤次が悪七別当に射られた部位をともに「鎧の引あはせ」(表記は区々)とする。金刀本系統は「くつけい」(くつけひ・くつけ・屈頸^{ほそくひ}などとも)。他系統には相当記述なし。

以上、単語の次元でも両者に符合の見られる事実をいくつか示した。如上の、國學院本と京図本系統との間に部分的な符合が見いだされる事実については、國學院本が京図本系統

本文を部分的に取り込んだ故に生じたと解釈してよいだろう。とすれば、國學院本における金刀本系統部は、松井本系列に近いがそれよりは純良な本文を持つ伝本を主要な親本としつつ、京図本系統本文を部分的に取り込む形で成立したと考えられる。なお、京図本系統本文の関与を考える上でいささか注意されるのが、國學院本の行間に付された校合本文である。

それは十三箇所に亘ってみられる。

- ① 其比、② 頼輔、③ 親久、④ 常胤、⑤ 河内守、⑥ 貞憲、
⑦ 所領、⑧ 二三年、⑨ 四鳥、⑩ よしひろ、⑪ 爰に、
⑫ 現世、⑬ 茂光

今のところ、これら校合のすべてと符合する本文を持つ伝本を見いだしていない。そもそも、校合に用いられた伝本が一本だったのか、複数本だったのか、それすら明らかでない。ただ、②③⑤については、校合が京図本に一致する（より正確に言えば、⑤の場合、当該部、京図本系統伝本の多くに欠けており、また、半井本系統・流布本系統も校合の方に一致）。原本を実見していないため、明言しがたいが、これら校合が國學院本の筆写者自身の書き込みであるならば、國學院本の本文といくつかの校合の両方に亘って京図本との合致が見いだされる事実は、校合に利用された異本文が時に本行本文として取り込まれることがあったかも知れないことを想像させる。

最後に、「是ヨリイ本」の注記のもと、巻末に取り込まれた為朝説話について結論のみを簡単に記す。千明氏の解題に記

される如く、その本文は京図本系統に属するが、さらに詳しく言えば、京図本系統の根津本系列、その中でも根津本と一致するところが多い。

考察に当たっては、杉原本、宮内庁書陵部蔵保元記、東大図文本の末流本は参照の対象外とした。

- (1) 「金刀比羅本系『保元物語』の三系列—原金刀本追求のノート—」(『軍記と語り物』5 昭4・12)の五七—五九頁、及び「宝徳本系統『保元物語』本文考—四系列細分と為朝説話追加の問題—」(『和歌と中世文学』東京教育大学中世文学談話会 昭5)の三二五—三二六頁。なお、犬井氏は松井本系列が共通に欠く部位を十九項掲出されているが、その中の一項「(軍記と語り物) 5 所載論文五七頁に掲出されている(11)は該当しないので、これを除外し、十八項とした。

- (2) 「『保元物語』写本目録稿」(『言語文化研究』第6

巻 徳島大学総合科学部 平1・12)

- (3) その三箇所を静嘉堂文庫蔵玄圃斎旧蔵本(以下、玄本と略称)の本文を以て示す。

- ① はるかにみたしてゑみさせ給てためともすてに
まいりて候まことにゆゑしきつわ物にて候けり
(3—5 8—11) (波線部を玄本・天理図書館蔵綴本
(以下、天本と略称)以外は「みわたせは」(表
記に小異あり)とする。)

② しかるにいま廿六代の御門をのこしたてまつりてたうきんの御門に王法のつきなん事こそくちをしけれ(8—8)

③ 日をのふるなら八人はともにつかれてかせんよハかるへししからハこの御しよをハきよもりなとにしゆこせさせられ候へ(9—8)²

この各々において、國學院本には傍線部相当記述が見られないが、これは、天本・玄本を除いた松井本系列の伝本と同じ。

(4) その他の校合について一言する。⑦⑪⑫は金刀本系統内部の異同に解消されるべき性格のものである。すなわち、これらは金刀本系統固有部位にあり、かつ、⑦⑫については、金刀本系統内部で、本行本文に符合する伝本、校合に符合する伝本の両様が存在する。また、④⑥⑨の場合、本行本文と符合する伝本は存在するが、校合と符合する伝本は見いだされない。逆に、①⑧⑩については、校合と符合する伝本は見いだされるが、本行本文と符合する伝本は見あたらない。ただ、⑧の本行本文「二三年」は「こ(後)三年」の「こ」を数字の「二」と誤ったことより生じたと推測されるし、⑩「愛」「殊」の相違なども、「こと」を「ここ」と誤読したためと思われる、ともに誤読・誤写に起因する異同のようだ。最後に⑬だが、これは

「是ヨリイ本」として巻末に付された為朝説話中にあり、京図本系統本文を伝える部分であるから、①⑫とは同列に扱えない。当該部、京図本系統には、本行本文に符合する伝本、校合に符合する伝本両様が存在しているので、⑬は京図本系統内部の異同として捉えられるか(金刀本系統の大多数の伝本は「茂光」とするが、糸魚川本のように「武光」とする伝本もある)。なお、「イ本」の本文中に、「茂光」と^{武イ}、さらなる異本注記が見いだされる事実は、校合に利用された伝本が一本ではなく複数であったことを語るものか。

⑤ 名古屋市鶴舞中央図書館蔵九帖本

同筆の『平治物語』(九卷九帖)と揃え。外題は、題簽(表紙左)に「保元物語 第一(一〇九)」。端作は「保元物語巻第一(一〇九)」。黒地金泥雲霞草本模様表紙。九卷九帖。墨付紙数第一卷三一葉、第二卷三〇葉、第三卷二八葉、第四卷四二葉、第五卷三六葉、第六卷三九葉、第七卷二九葉、第八卷三〇葉、第九卷三七葉。遊紙なし。列帖装。本文料紙は金泥草本模様鳥の子。寸法二九・七×二二・一。一面最多十行。平仮名交じり。各帖表紙右肩及び見返し左肩に「9134」²、⑤1(一〇九)のラベル貼付。表表紙見返しに「市立/名古屋/図書館/蔵書印」(五糧)の朱方印、裏表紙見返しに「市立/名古屋/図書館蔵書印・123938・昭和26年4月18日」の

楳円青スタンプ。目録・章段区分あり。本文は寛永三年平仮名交絵入整版本（以下、寛三本と略称）に近似するので、それ（もしくはその転写本）を基幹として作成された伝本とみられる。挿絵はない。ごく一部に他版との字句の一致が認められるが、誤写或いは是正の偶合ではあるまいか。書写は丁寧だが、一行程度の重複が一箇所⁽²⁾及び一行程度の欠脱が四箇所⁽³⁾認められるほか、小規模の誤写や脱字・句が全体に亘って見いだされる。寛三本に比して、平仮名表記が多い、振り仮名・濁音符がない、といった特徴を持つ。

(1) 具体例を二、三示す。以下、該本を九帖本と略称する。本文末（一）内に、旧日本古典文学大系本付録古活字本における当該記述の所在位置を示す。

① くらゐをこえられ給ふ事今にハしめぬれいなり^(35下1)

傍線稿者。以下同。傍線部、整版本の中、寛三本は「位をこえられ世をとられ給ふ事」とする（寛元本も寛三本に同趣）。他版、すなわち明暦三年平仮名交絵入本（以下、明暦本と略称）・貞享二年平仮名交絵入本（以下、貞享本と略称）・元禄十五年平仮名交絵入本（以下、元禄本と略称）は九帖本と同じ。

② てんしくしむたんをハしらす^(37下1)
傍線部、整版本の中、貞享・元禄本が九帖本と同じ。寛三本を含む他版は「しはらく」「暫ラク」。

③ このよしを申ておふてまいるへしと申せハ返々此程のなさけこそわすれかたくおほしめせと御ちやう有ける^(38上1)

傍線部、整版本の中、貞享・明暦・元禄本が九帖本と一致。寛元本・寛三本には「ハ」がない。「おほしめせ」までが崇徳院の言であるから、「ハ」のある形は誤り。

(2) 重複については、「かふらやにていハやと思ひて目九つさしたるかふら矢にていはやとおもひてめ九つさしたるかふらのめはしらにハかとをたて」^(36下1)とある箇所、「かふら」の目移りにより生じた誤りである。

(3) 目に付く四箇所の欠脱は左の通り。（一）内の記述が九帖本には存在せず、これを寛三本で補う。

① ちよくちやうなれハちからなし（母かめのとかいたきて山林ににけかくれたらんハいかせん）六條ほり川のしゆく所にあるたうふくの四人をはすかし出してあひかまへて（中略）うしなへ^(38下6)

② このふえんくんをはいしてきさきとさためし（かバ齊国大にやすし是しう女のこう也といへりしかる）を今ハたゝかんしよくにふけりてうあいをさきとして^(39上4)

③ 入かたしと申せは（さらばきよもりかもとへ入ま

いらせよとおほせけれハにし）八てうへなしたて
まつるに（³⁹⁵上¹⁹）

④ そのかミせつほうを（きゝしに過去ゐんをしら
んとほつせハそのげんざいのくハをミよ）みらい
のくわをしらんとほつせハ（³⁹⁸下⁸）

① については省筆の可能性も考えられるが、他は不
注意による欠脱である。

⑥ 原水蔵三帖本

同筆の『平治物語』（三巻三帖）と揃え。外題は、淡黄色地
金切箔散らし題簽（表紙中央）に「保元物語 一（一三）」、
端作は「保元合戦記上」「保元物語卷第二（三三）」。黒地金泥草
本模様表紙。金紙見返し。三巻三帖。紙数は、第一巻遊紙前
後各一葉、墨付五〇葉、第二巻遊紙前一葉後三葉、墨付六二
葉、第三巻遊紙前一葉後三葉、墨付五〇葉。列帖装。本文料
紙は鳥の子。寸法二三・二×一七・〇糎。一面一〇行。平仮
名交じり。目録・章段区分あり。本文は、明暦本を写したも
のと判断される。挿絵はない。明暦本と対校するに、第一巻
墨付第六葉裏、第四八葉裏、第三巻墨付第一五葉裏、第二八
葉表に各一行分程度の欠脱が見いだされることを始めとし
て、小規模な脱字・句及び誤写が散見し、かつ、表記にい
くほどか漢字・仮名の相違が認められるものの、全体的に、
書写姿勢は忠実であり、明暦本以外の本文を参照・利用した
形跡は認められない。

（1） それら欠脱は左の通り。（一）内の記述が原水蔵本
には存在せず、これを明暦本で補う。本文末（一）
内に、旧日本古典文学大系本付録古活字本における
当該記述の所在位置を示す。

① ふしきのすいさう有（ごんげんをくはんじやう
し奉らはやとおほしめし）まさしきかななきや有
と仰けれハ（³⁴⁶下¹⁶）

② かつさにハ（介の八郎しもつさにハ千葉介常た
ね上野にハ）せしもの太郎物いの五郎（³⁵⁹下¹⁸）

③ うんめいあらハ（はからさるほかの事も有なん
かんのこうせん）皇帝ハきんこくせられしかとも
（³⁸⁷上⁷）

④ 左京の大夫（入道ハひたちの国あふミの中將ま
さなりハゑちこの国）もりのり入道ハさとの国（³⁹¹
下¹¹）

⑦ 原水蔵一帖本

題簽（表紙中央）剥落。端作は「保元合戦記上」「保元物語
卷第二（三三）」。紺地金泥雲霞草本模様表紙。金紙見返し。三
巻一帖。綴糸は近年の物。墨付紙数第一巻五五葉、第二巻七
一葉、第三巻六四葉、遊紙は前一葉、上、中、下巻の間各七
葉、後四葉。列帖装。料紙は鳥の子。寸法二三・〇×一七・
二糎。一面十行。平仮名交じり。第三巻尾題下に「御ゑさう
しや／天下一／小泉やまと」の朱印。目録・章段区分あり。

汚本。以下、一帖本と略称する。本文は寛三本に酷似することより、それを基幹として作成されたと判断される。挿絵はない。寛三本に比すと平仮名表記が目立ち、また、「お」と「を」、「は」と「わ」など部分的に仮名遣いの相違が見られるものの、書写姿勢はきわめて丁寧で、ごく微細な誤写が数箇所見いだされるにすぎない。⁽¹⁾一帖本と寛三本との異同で、注目すべきは左掲六項目である。文末(一)内に、旧日本古典文学大系本付録古活字本における相当記述の所在位置を示す。傍線は稿者。

- ① 近衛院の誕生を「保延五年」とする (34上4)
 - ② 門戸をとちてあんと^{35上1}の思ひなし武士の人々ハ兵具をあつめはせめくりけれハ
 - ③ 此御くわたてあるへしやそうへうの御はからひもはかりかたく (35上3)
 - ④ すいこ天皇の御宇にしやうとく太子世に出てもりやのぎやくしんをほろぼして (35上6)
 - ⑤ 大庭の平太かけよし同三郎かけちかとそ名のつたり (36下2)
 - ⑥ すしゆん天皇はげきしんにをかされ給ひき (38下1)
- 右の各項目について簡単に述べると、①の場合、寛三本は保元五年と誤るが、一帖本は保延五年に是正している。ただし、この是正は、大阪天満宮蔵本・仏教大学図書館蔵本・彦根城博物館蔵本など、寛三本を元に作成されたいくつかの飾本・嫁入本にも見られる。②については、寛三本「門戸をと

ち人々ハ兵具をあつめけれハ」とし、系統内諸本も寛三本に同じ。小規模ながら一帖本固有の増補である。③の場合、寛三本「此御きそうの御はからひもはかりかたく」とし、系統内諸本も寛三本とほぼ同じ。中で、一帖本の記述が最も明解である(大東急記念文庫蔵写本は一帖本に近いが、「そうへう」を「宋廟」と誤る)。④は、寛三本、傍線部相当記述を欠く。系統内の古態本並びに他系統は一帖本に近い姿を伝える。⑤は、寛三本、やはり傍線部相当記述を欠く。系統内の古態本並びに他系統は一帖本と同形。⑥については、傍線部、寛三本「す神」とし、また系統内の他本「崇神」「すじん」「そう神」などとするが、一帖本の記す「すしゆん」(崇峻)が正しい。

右掲の諸例は、一帖本と寛三本の間に見られる相違の顕著なものだが、②以外のすべてにおいて一帖本の本文がより妥当であることが確認できる。このことより、一帖本は寛三本を忠実に書写したもののだが、ただ機械的に写し取ったのではなく、疑問のある箇所については、吟味を加えてこれを是正したり、また、不足気味の本文を補うなどの処置を施したものと見える。本文の吟味がなされている点、美装本としてはいささか異色と言える。

- (1) 誤写・脱字の事例を二、三示すと、寛三本に「定て御後悔あるへし」(35下4)、「草すりのはつれをいさせて」(36上8)、「少納言入道うけ給はつて」(36下3)とする各傍線相当部を、一帖本は「あるある」、

「いはせて」「うけはつて」と誤る。

⑧ 国文学研究資料館蔵奈良絵断簡

請求情報 ユ3—4⁵—1¹2¹。保元平治あわせて二十一枚。

断簡自体に明記はないが、国文学研究資料館により保元平治物語奈良絵と判定されている。各断簡を収めた紙製ケースに打たれた番号をもつて示すと、二十一枚中、1、6、7、8、1、4、5、6の八枚が保元物語絵と推定される（9も含まれるかと思うが決しがたい）。各々が、いかなる場面を描いたものか判断に苦しむものもあるが、以下に、推定の結果を示す。

1—不明。或いは為義参候の場面か。彦根本2—1見開き絵の右半分に似るか（「新院ためよしをめさるゝ事付鵜丸の事」の章末）。寛三本は相当絵なし。

6—不明。或いは忠実幽閉の場面か。彦根本6—2（「大相国御上洛の事」の章末）、寛三本3—7（彦根本と同位置）。

7—崇徳院齋院御所に御幸の場面。彦根本1—7（「新院御むほん露頭并てうふくの事付内府いけんの事」の章末）、寛三本1—5（彦根本と同位置。絵柄は異なる）。

8—不明。或いは忠実悲嘆の場面か。彦根本4—3（「左府御さいこ付大相国御なけきの事」の章末）、寛三本2—7（彦根本と同位置。絵柄は異なる）。

13—崇徳院方軍議の場面。彦根本2—4（「新院御所各門々

かための事付いくさひやうの事」の章末）、寛三本1—9（彦根本と同位置。絵柄は異なる）。

14—洛中騒動の場面。彦根本1—4（「新院御むほんおほしめしたつ事」の章末）、寛三本1—3（彦根本と同位置）。

15—為義鵜丸を賜る場面。彦根本2—2（「左大臣殿上らくの事付ちやくとうの事」の章末）、寛三本1—6（「新院ためよしをめさるゝ事付鵜丸の事」の章末）。

16—頼長の死骸実検の場面。彦根本5—4（「左大臣殿御しかいしつけんの事」の章末）、寛三本3—3（彦根本と同位置）。

となる。なお、各図について、彦根城博物館蔵彩色絵入写本（彦根本と略称）並びに寛三本に相当絵或いは類似絵が見られる場合はその旨を記した。「彦根本6—2（「大相国御上洛の事」の章末）」との記載は、彦根本第六巻第二図を指し、その絵が「大相国御上洛の事」の章末にあることを示す。

「約半数の図柄は、寛永三年（1654）刊本（略）や明暦三年（1657）刊本の挿絵と近似しており、刊本に挿絵のある場合はそれを基にしているようだが、絵師の私意を交えた点も認められる。」（国文学研究資料館通常展示「平家物語とその周辺」リーフレット）と説明されるように、寛三本に似る絵柄が少なからず見いだされる（明暦本は寛三本をもとに制作された版）が、各絵の説明中に記したように、国文学研究資料館の全てが彦根本とほぼ同じ絵柄を有している。対し

て、寛三本の場合、国文研蔵断簡の1に相当する絵がなく、7、8、1³については絵柄が異なる。また、6、1⁴、1⁵、1⁶については、同絵柄ではあるが、類似度において彦根本に及ばない。国文研蔵断簡は、寛三本よりはるかに彦根本に近似している。⁽¹⁾国文研蔵断簡と彦根本の間に濃い類似性が認められることより、恐らくは、寛三本の挿絵を元に制作された規範的な奈良絵本が存在しており、国文研蔵断簡・彦根本共にそうした共通の規範絵をもとにそれぞれ独自の工夫をもつて制作されたと見るべきだろう。⁽²⁾ただ、両者を比較した場合、描法にかなりの相違があり、国文研蔵本の方がより写実的な筆致になっていることより、制作の場・制作者などは異なっていたと考えられる。なお、平治物語絵と推定される残りの十二枚についても、彦根本並びに寛三本との関係について、保元物語絵とほぼ同様の現象が指摘できる。

(1) 国文研蔵断簡と彦根本の絵柄のいずれが寛三本に
より近いかは決しがたい。例をあげて示すと、第15
図、庭上に祇候する源為義父子が寛三本・国文研蔵
断簡では直垂姿、彦根本では武装姿に描かれている。
この点に着目するなら、寛三本・国文研蔵断簡に近
似性が認められる。しかし、第6図の場合、描きこ
まれた五人の人物中、法体と童風の二人が室内、他
三人が縁に座す構図を持つ点、寛三本・彦根本が一
致しており、人物すべて(六人)が室内に座す構図
の国文研蔵断簡とは異なる。この場合は寛三本と彦

根本に類似が認められるといえる。以上のようにその類似性に一貫したものが見られない。

(2) 『玉英堂稀観本書目』第21号並びに第27号掲載『保元平治物語』奈良絵本は、目録に掲載されている数面の絵から判断する限りにおいて、国文研蔵断簡や彦根本との間に近似性を見いだせない。

⑨ 真宗興正派興正寺蔵『ふなおか山の物かたり』

外題は白地無辺題簽(表紙中央)に「ふなおか山の物かたり」、端作も同。紺色無地表紙。一卷一冊。墨付十二丁。袋綴。本文料紙は楮紙。寸法二七・八×二一・二。一面十行。平仮名交じり。表表紙右肩に「ナ」と朱書。『お伽草子事典』(小林健二氏執筆)が記すように、『保元物語』為義幼少子息の船岡山における処刑とその母自害の章段を「独立させて物語化し」た小品。『保元物語』を基にしながらもかなり物語草子として潤色を加えられている」と説明されるように、筋立ては『保元物語』と同じだが、記述内容に相違が認められる。刑執行者を「はたの、四郎」とする点(『保元物語』は、波多野次郎・波多野小次郎・秦野次郎などと区々だが、四郎とするものはない)、四人の子供の中、つるわかとかめわかの子が逆になっている点、四人の傳の名の部分的相違、てんわうの傳ないきのへいたの年齢を十九歳とする点(『保元物語』には明記なし)などを、その事例として挙げるができる。本文や表現面でも固有性が濃く、そうしたことも一因となっ

てか、母胎となった『保元物語』の系統を特定することが困難である。具体例を示して述べると、該作は、母の年齢を三十七歳と記すが、これは『保元物語』では京図本系統にのみ見いだされる記述である（他系統には年齢の明記はない。『参考保元物語』によれば、現在所在不明の岡崎本にも当該記述が見られた由である）。この事実を根拠として、母胎を京図本系統に特定できるかといえ、そうとも言い切れない。というのも、該作には、「はたのかきたるよろいあかかわおとしなれともなみたにあらはれてあらいかわにそなりにけり」との一文があるが、京図本系統には相当記述がなく、半井本系統や金刀本系統（松井本系列を除く）及び金刀本系統の派生系統に同趣文が見られるからである。この他、細部の筋立てについては、鎌倉本や流布本とも合致・類似する点が少なからず見いだされる。該作は、親疎の差はあれ、部分部分において、『保元物語』の複数の系統と個別的な符合・類似を見せており、これに本文・表現面の固有性も加わったためか、母胎となった『保元物語』を一系統に絞り込むことができない。この現象をどう理解すべきか。該作の形成に『保元物語』の複数の系統本が関与したのか、或いは、現存知られていない伝本が基になったのか、さらにいえば、異本本文を比較・併記した『参考保元物語』（元禄六年刊行）から生み出された可能性もなくはない。現段階では不明とせざるを得ない。

⑩ 鶴岡市郷土資料館蔵本

原本未見。複写物により調査。書名不詳。墨付三十九丁。『保元物語』『平治物語』『曾我物語』『十訓抄』等諸書より、章句・文辞を抜き書きしたもの。『保元物語』に関して述べれば、金刀本・鎌倉本・流布本の各々に相似する章句が見いだされることより、一見、複数の異本を博引しているように見えるが、事実は、『参考保元物語』所引の複数異本の本文を抜き書きしたものである。『平治物語』についても同様。同館の御示教に拠り、該書が、照井長柄関係の資料として保管されていること、照井長柄（文政二（一八一九）～明治二十二（一八八九））が『新編庄内人名辞典』に立項されていることを知った。

（付記）

調査にあたっては、糸魚川市民図書館原川幸雄氏、佐賀県立図書館石橋道秀氏、真宗興正派宗務所越智宣裕師・熊野恒陽師をはじめとして、多くの方々の御厚意を頂いた。また、糸魚川本・佐賀本の所在については、長坂成行氏の御示教を得た。記して深謝致します。